全

滅

高木　俊朗

全滅

インパール作戦―戦車支隊の最期

文藝春秋刊

高木俊朗（たかぎ　としろう）
明治41年東京生れ．早稲田大学政治経済学部卒．
元日本映画社監督．陸軍報道班員として昭和14年
から20年まで，中国，マラヤ，インドネシア，タ
イ，仏印，ビルマなどに従軍．
著書「インパール」「遺族」「知覧」「抗命」「戦死」
現住所――神奈川県逗子市桜山 6-9-24

全滅

定価　四八〇円

昭和四三年六月五日　第一刷

著者　高木俊朗
発行者　上林吾郎
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話〇三・二六五・一二一一

印刷　凸版印刷
製本　中島製本

万一乱丁落丁がありましたらおとりかえします

©1968 TOSHIRO TAKAGI

Printed in Japan

全滅　目次

盗まれた作戦　5
トルブン隘路口　15
蜂の巣陣地　37
連隊長の交代　80
ニントウコン　116
青つり星　赤つり星　127
白昼攻撃　171
死守命令　208
戦場往来　228
潜入部隊　260
最後の日　286
あとがき　309

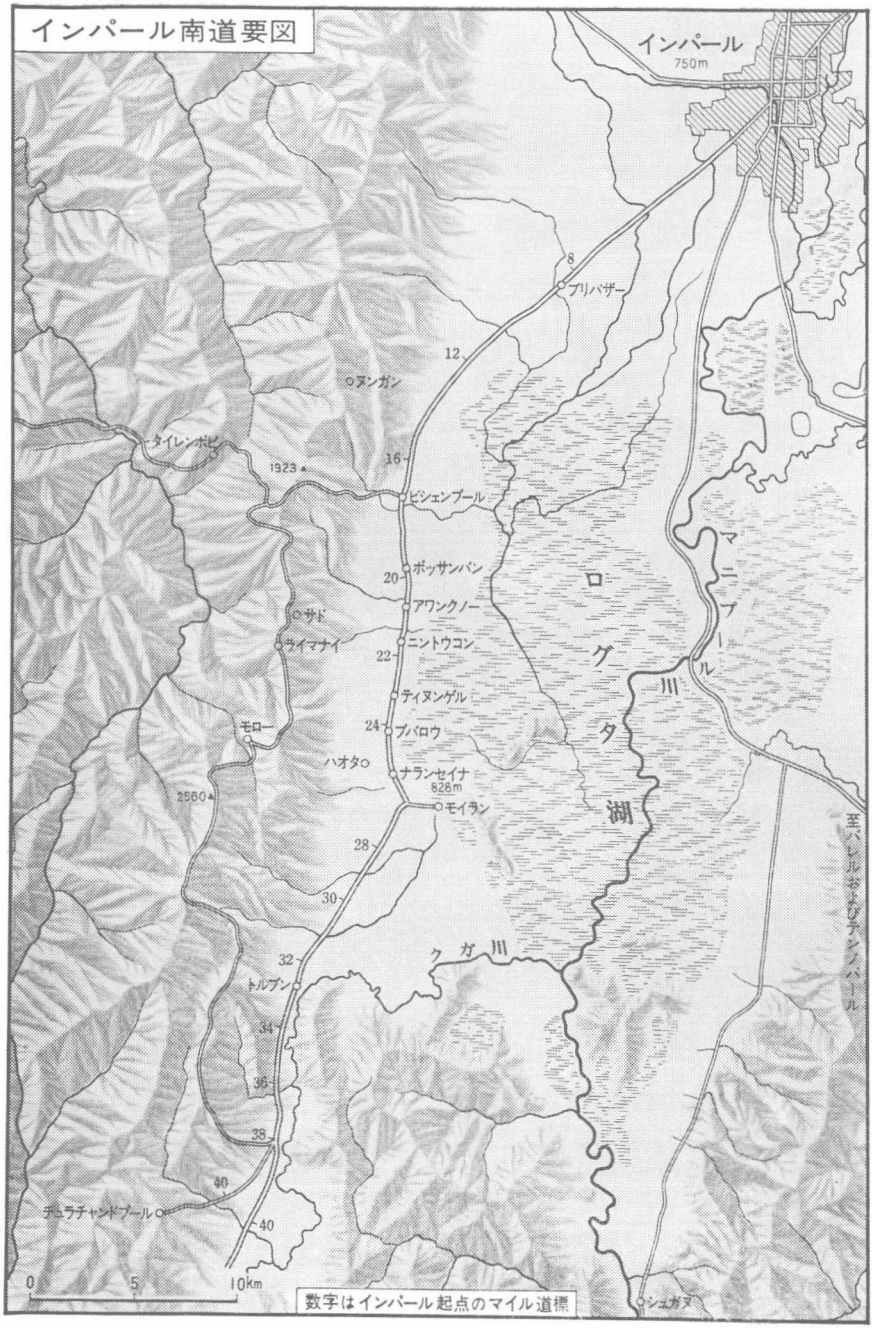
題字・装幀　竹中　誠子

地図作成　高野橋　康

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

全滅

インパール作戦——戦車支隊の最期


インパール南道要図
インパール
750m
8
ブリバザー
12
ヌンガン
タイレンポビ
1923
16
ビシェンプール
20
ポッサンパン
アワンクノー
サド
ライマナイ
ニントウコン
22
ティヌンゲル
モロー
24
ブバロウ
ハオタ
ナランセイナ
826m
モイラン
2560
28
30
32
トルブン
34
36
38
40
チュラチャンドプール
40
0
5
10km
数字はインパール起点のマイル道標
ロ
グ
タ
湖
マニプール川
クガ川
至バトルおよびテンバール
シェガヌ

盗まれた作戦

私は長い間、その戦闘のことが気にかかってならなかった。と、いっても、それは極めて小さな場所でおこなわれた、小部隊の戦闘である。だが、その部隊は全滅した。

昭和十二年に中国と戦争を始めてから、昭和二十年に太平洋戦争が終るまでの間に、日本の陸海軍部隊には、全員戦死、あるいは全滅した戦況がすくなくなかった。そのなかで私がその小部隊のことに関心を持ちつづけたのは、作戦の経過が不可解か、さもなければ愚かしいとしかいいようがなかったためであった。

その戦闘は、昭和十九年、インドのインパールの付近におこった。日本軍のインパール作戦は無謀であり、異常であったといわれている。そのために、その小部隊の戦闘もまた、無謀になったには違いなかった。しかし、その行動を考えてみると、無謀というだけではかたづけきれないものがあった。私は次第に、その小部隊の行動に、インパール作戦の無謀とか矛盾とかの、すべての要素が集約されているのに気がついた。いわば、その戦闘は、インパール作戦に参加した三個師団の全部の状況に共通するものであった。

その小部隊は歩兵の瀬古大隊と岩崎大隊、それに戦車第十四連隊、野砲兵第五十四連隊第二中隊、独立工兵第四連隊であった。大隊とか連隊といえば大部隊であるが、この時の各隊は、十数名から百数十名程度が生き残っているにすぎなかった。このうち、瀬古大隊は第十五師団第六十七連隊の第一大隊であり、岩崎大隊は第五十四師団第百五十四連隊の第二大隊であった。全く別個の五つの部隊が、インパール南方のニントウコンの小部落で、一隊となって連合軍と対陣した。日本軍の最前方陣地から、川をへだてて百メートルもない所に、連合軍陣地の前縁があった。

最後にニントウコンの日本軍は全滅し、各部隊の少数の生き残りが戦場を脱出した。この戦闘によって、瀬古大隊、岩崎大隊は、それぞれの師団長から賞詞を与えられた。岩崎大隊の賞詞の要旨は、次のようであった。

賞　詞

岩　崎　大　隊

右ハ昭和十九年五月転進ヲ命セラルルヤ長駆遠隔ノ地「アキャブ」方面ヨリ、輸送困難ナル状況下ニオイテ速カニ戦場ニ到着シ、予ノ指揮下ニ入ルヤ戦闘当初ヨリ堅陣「トルブン」隘路口ノ敵ヲ突破シ「モイラン」付近ニ之ヲ圧迫殲滅シ「インパール」重点方面ノ補給路ヲ再興セリ

コノ間岩崎大隊長以下死傷続出スルモ益々士気旺盛ニシテ次テ「シンゲル」「ブバロウ」「ニ

ントウコン」「ポッサンバン」付近二十五キロメートルノ堅陣ヲ抜キ大ナル戦果ヲ収メ当兵団ノ戦闘ヲ著シク有利ナラシメタリ

右ハ大隊長以下団結堅固、攻撃精神最モ旺盛ニシテソノ武功抜群ナリ

ヨッテココニ賞詞ヲ与フ

昭和十九年十一月二十六日

弓兵団長　陸軍中将　田中信男

岩崎大隊の戦況が、この賞詞の文章のように勇壮であり戦果をあげたとは、すぐには信じられない。軍隊の文章には、軍特有の表現があるからだ。その最も悪名の高い標本は、戦時中の大本営発表である。軍用の文章もまた、惨敗していても大勝利を得たかのように表現することが多かった。

この賞詞にしても〝隘路口の敵を突破し〟〝圧迫殲滅〟したとあっても、その通りには考えられなかった。それは、インパール作戦当時の私の知った範囲の知識でも、不可能と思われたからだ。トルブン隘路口からニントウコン、ポッサンバンに至る間は、巨大な山脈のなかの小さな盆地である。いわば、すりばちの底である。おりから、インドの雨季にはいり、連日、豪雨が襲ってきた。その付近一帯のアッサム州は、降雨量が世界一の地域である。インパール盆地は、そのまま湖沼に変った。そのなかに、戦車と歩兵を出しても、行動できるとは思えなかった。

まして連合軍はおびただしい火砲と飛行機を持っていた。盆地のなかにはいれば、上空と周囲から、ねらい撃ちにされるだけである。そのようなところに、戦車と歩兵を出すことになったのは、なぜだろうか。私はそれに、単に無謀とするだけではすまされないものを感じた。これが長い間、疑問になって残っていた。

最近になって、私は、つてを求めて、これらの部隊の生き残りの人々に会って、当時の話を聞いた。また、関係者の手記、記録を読み、戦史を調べた。

そのなかで私が興味をひかれたのは、これらの部隊が、はじめて合一した地点がトルブン隘路口であったことである。岩崎大隊の賞詞にあるように、瀬古大隊も戦車連隊も、同じく転進を命ぜられて、インパールに向った。トルブン隘路口は、その進路の途中にあった。瀬古大隊その他がトルブンに到着する前日に、英印軍（日本側の呼称で、インド兵を主として編成した英国軍のこと。また、英軍の総称でもあった。）がそこに出てきて前進をさえぎった。このために戦闘がおこった。日本軍の各部隊は、梯団（ていだん）となって前進していた。歩兵の両大隊の先頭部隊は、到着と同時に戦闘させられて、全滅同様になってしまった。瀬古大隊長は戦死し、岩崎大隊長は負傷して後送された。

後続部隊も、つぎつぎに投入され、大きな損害をだした。

このような予期しない戦闘がおこったのは、第十五軍司令官の牟田口廉也（むたぐちれんや）中将が、インパール作戦のさなかに、攻勢重点を変更したためであった。そして、その方面に軍の戦闘司令所を移すことにして、軍司令官がまっさきに飛びだして行った。昭和十九年五月十三日であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

新しく攻勢重点をおくことになったのは、インパール南西に接近している弓第三十三師団の正面である。それまで、牟田口軍司令官は烈第三十一師団、祭第十五師団に重点をおいたが、どれも成功しないで、作戦の前途は危急になってきた。そのため、弓第三十三師団へ重点を移すとともに、瀬古、岩崎、戦車などの各部隊を急進させて戦力の増強を計った。

トルブン隘路口は、戦術の上から見れば、一つの関門となる地点であった。トルブンで連合軍と衝突した時、日本軍の指揮官や参謀は、必死になって啓開しようとした。それは、ここを押えられると、弓師団の補給路を遮断される、と考えたからだ。また、それが連合軍の出てきた目的の一つだと判断した。

こうして、トルブン隘路口で、一週間にわたって、日本軍は悪戦苦闘した。

牟田口軍司令官が攻勢重点を移したのは、敗勢をたてなおそうとするあがきであった。そのため軍司令官以下、軍参謀長、各参謀をあげて弓の正面に移動した。このことは、当時の軍司令部の判断や計画がどうであろうと、今日よりふり返ってみれば、異常な行動であった。瀬古、岩崎、戦車などの各部隊が全滅するに至ったのも、実にそのためであった。

しかし、私はトルブンの戦闘経過をたどっているうちに、別な疑問を感じてきた。連合軍と日本軍が、ほとんど同時にトルブンに出て衝突したのは、はたして偶然といえるだろうか、という疑問である。

牟田口軍司令官はこの移動の前までは、インパール東南のパレル道に攻勢重点をおいていた。

この時、パレルを守っていた連合軍は、第十七インド師団の第四十八旅団であった。

五月十一日。牟田口軍司令官は攻勢重点を弓第三十三師団方面に移すことを決定、軍参謀長久野村桃代中将をつれて、弓の師団司令部のあるモローに向って出発した。瀬古、岩崎、戦車などの部隊が、弓師団に配属の命令がでたのも、この日であった。

十三日。軍司令官と軍参謀長はモローに到着した。

十五日。連合軍は、第四十八旅団をパレルから移動させた。同日。第十五軍の高級参謀木下秀明大佐、作戦参謀平井文中佐、後方参謀高橋巌少佐らは、軍司令官のあとを追って出発した。この時、田中信男少将が同行した。田中少将は弓の後任師団長として赴任の途中であった。

十七日。トルブン隘路口で日本軍の自動車部隊が襲撃された。そして連合軍が隘路口を押えた。この部隊が、パレルから移動した第四十八旅団であった。この日の午後になって、木下高級参謀、田中少将らがトルブンの手前にある弓師団の集積所に到着し、状況を知った。

十八日。夕方、瀬古大隊が到着し、すぐに攻撃に出た。その夜、瀬古大隊長以下多数が戦死し、攻撃は失敗に終った。

このように対照した限りでは、トルブンの衝突は偶然にすぎないと思われるのである。インパール作戦では、両軍がわずかな時日の差で、同じ地点に進出した例がすくなくない。だから私も、同じような偶然だと思っていた。

最近になって、といっても、昭和四十三年一月のことであるが、外国の知人から週刊誌を送っ

てきた。『第二次世界大戦史』という、戦史だけを掲載している週刊誌であった。英国のピュアネルという出版社の発行で、編集主幹は有名な軍事評論家のベーシル・リデル・ハートである。内容も、興味本位でない、本格の戦史である。

私の所にきたのは、インパール作戦の号であった。表紙には『ビルマにおける転機、コヒマとインパール』と大きく標題を記してあった。私は、こうした戦史専門の週刊誌を刊行している英国人のまじめな戦争研究に心をひかれた。

そのなかに、インパール付近の地図があり、それに連合軍と日本軍の兵力の配置や作戦行動を図解してあった。それを見ているうちに、私の古い記憶がよみがえってきた。その地図の上に、ただ一語〝Vフォース〟の字があった。当時の英軍の持っていた情報収集の部隊である。日本軍の動静をさぐるために、ビルマ領内に潜入して、さかんに活躍していた。時には飛行機から落下傘でおりたこともあった。隊員は変装していたし、ビルマ人を部下に使っていた。無線による交信もしていた。

日本軍のインパール作戦は、昭和十九年三月八日、弓第三十三師団の行動発起で始まった。その三日前、三月五日の夜、英軍のグライダーによる空挺部隊が、ビルマ領内におりた。空挺部隊はウントー、コーリン、カータなどをむすぶ三角地帯を占拠して、鉄道を遮断し、勢力をひろげた。これがインパール作戦の日本軍の後方をかき乱すことになった。

これは、日本軍が、『ウ』号作戦と称して秘匿していたインパール作戦計画や、作戦発起の日

時までを連合軍が知ってのことであった。連合軍は先制攻撃として空挺部隊を飛ばした。これがインパール作戦の勝敗を決する一つの原因にもなった。そこまでの情報をつかんだのは、Vフォースの活躍によるものであった。

私は戦史週刊誌の地図に記されたVフォースの文字を見ているうちに、ふと、思いついた。それは、牟田口軍司令官の攻勢重点の変更計画や、軍司令官の行動は、すべてVフォースに知られていたのではないか、ということであった。

ことに牟田口軍司令官が弓の師団司令部に移動する時には、約四百キロメートルにわたって、アラカン山系の山道を進んだ。軍司令官と軍参謀長が同行していることだから、それに付随する将兵も多かった。ことに軍司令官の護衛のために、衛兵中隊は二台のトラックに分乗して、前後を走った。普通の軍人や部隊の移動でないことは、一見して明らかであった。

牟田口軍司令官の動きは、Vフォース隊員に監視されていた。インパール作戦計画を盗んだVフォースとしたら、牟田口軍司令官の戦闘司令所の移動をつかみ、それが何を意味するかを察知するのは容易のことといえる。トルブン隘路口に、時を同じくしてインド旅団が出てきたのも、偶然の一致とはいいがたい。

しかし、これは私の推察にすぎない。私が手にした戦史週刊誌には、Vフォースの文字は地図の上に一ヵ所あるだけでなんの説明もなかった。トルブンの戦闘についても書いてなかった。しいて結びつけて考えるならば、Vフォースの文字の位置である。それはカバウ河谷の上に記して

ある。同じカバウ河谷のインダンジーには、牟田口軍司令官の戦闘司令所があった。地図の上の文字の位置は、何かの根拠によって記される。そうとすれば、両者は近い所にいたといえる。

私はこの推察を捨てることができなかった。それは、トルブン隘路口を占拠した英印軍の撤退ぶりのためである。五月二十四日の夜、英印軍は潮の引くように、いなくなってしまった。しかも、それまでの戦況は、日本軍の歩兵部隊は全滅していたし、英印軍は空中補給によって、なお余裕をもって占拠をつづけられる状況にあった。

さきの岩崎大隊に与えられた賞詞には〝隘路口の敵を突破し〟とあるが、実際は、敵の方でいなくなったのである。もともと第四十八旅団は、交代のため移動の途中であったのだ。

あの時、日本軍の指揮官や参謀が考えたように、英印軍がトルブンに出たのは、弓師団の補給路の遮断のためであるならば、さらに占拠をつづけるべきであったろう。それをしないで、急に移動してしまったのは、一つの目的を達成したからであろう。その目的は、補給路の遮断よりは、牟田口軍司令官と戦闘司令所の後方をおびやかし、動揺させることであったのではなかろうか。

それかどうかは別として、牟田口軍司令官はトルブン隘路口の戦闘が終るとまもなく、再び四百キロメートルの山道を越えて去った。ただし、この時は、牟田口軍司令官も弓師団からの攻勢は不可能とわかって、見切りをつけたのは事実のようである。

連合軍はトルブン隘路口の遮断に、もう一つの目的をもっていた、と見られる。それは、ここで日本軍の増加部隊をくいとめておいて、その間に、インパールの防御線を強化することであっ

た。のちに、瀬古、岩崎などの部隊が全滅したニントウコンの英印軍陣地は、この間に強化されたようだ。

トルブン隘路口の戦闘で、瀬古、岩崎の歩兵部隊は過半の兵力を失った。これらの部隊は、牟田口軍司令官の無成算の命令によって動かされた。しかし、その犠牲を作りだしたのは、実はVフォースであった、といえるかも知れない。

これは、あくまでも、私の推察にすぎない。推察とか推理は、歴史を書くために必要であるとしても、歴史にはなり得ない。歴史は事実の上に組み立てられなければならない。だが、戦闘の経過とか、戦争の真実を知ることは困難が多い。

その一例が、さきの岩崎部隊の賞詞である。それは部隊の激励や慰労になるとしても、そこに書かれた通りの事実があったとは受け取れない。賞詞を与えられたことは事実であるが、その内容は軍隊精神をもって色づけしてあるか、事実とはかけ離れた表現をしている。

私は真実を知ることのむずかしさを痛感しながら、生き残りの人々の話を聞き、手記を読みあさった。次第に、私には、賞詞の文字とは違った現実が明らかになってきた。それこそが、戦争の実相ではないかと思われるのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c